
異界の歴史書

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の歴史書

【Nコード】

N4045T

【作者名】

シエイド

【あらすじ】

「じゃあ夏休み明けまでに、資料を揃えておいてくださいね」
高校二年夏。俺は資料を探すべく向かった図書館で面白い本を見つける。『クロノディステディア王国記』 ただの物語だと思ったら異世界の歴史書！？ 意味の分からないままトリップさせられた世界で、俺はその歴史書を手に入れた。未来を予見する軍師”として戦っていくことに・・・！

vol.1 プロローグ

「じゃあ夏休み明けまでに、資料を揃えておいてくださいね」

先生のその一言で、今日のホームルームは終了した。

あとは帰るだけ。特定の部活に入っていない俺は、今日中にも宿題を終わらせる気でいた。

教室を出て階段を降り、靴を履き替えて玄関を出る。

「・・・あつっ」

明日から夏休みということもあり、この晴天の日はとてつもなく暑かった。

玄関の扉を開けると同時に、体もやあつと体を暑さが包み込む。

俺はそのまま駐輪場へと向かい、自分のチャリを引っ張り出した。

「確か古代に関する文献についてのレポート、だったよな」

帰り際に出された課題の内容を復唱しつつ、俺はペダルをこぎこぎ図書館へと向かった。

調べるだけなら別に帰ってからネットでも良いのだが、単純に図書館の雰囲気が好きだから。

図書館は高校とそんなに離れているわけでもない。

チャリをとばせば風を楽しんでいる間に着いてしまふ距離だ。

今回もこんなことを夢想している間に到着したので、チャリを適当に放置し図書館の自動扉を通る。

何故だろうか、公共施設の夏は寒い。

涼しいを通り越して寒い。

司書さんなんかは長袖を着て仕事しているほどにだ。

これは電気の無駄遣いだなあ、とか考えながら、俺は古代に関する文献、その資料を見つかるべく図書の本棚を散策し始めた。

「つつつても、古代に関するならなんでもいいのか？　あまり聞いてなかったぜ……」

学校に入って二年目になるもそこまで親しい友人がいるわけでもなく、ケンカに明け暮れる毎日……。

心を癒してくれるのは本と妹の存在だけだった俺には、授業を聞いていなかったからといって、何かしらを聴けるようなクラスメートは居なかった。

「ま、いっし。とりあえずは調べようか、歴史書漁ればなんか出てくるだろ」

のんびりと頭の後ろに手を組み、俺はプラプラ奥の本棚へと向かう。

『歴史・文学』

横つちよにそんなことが書いてある棚を見つけ、適当に古い歴史の本を見ていった。

「日本史でも世界史でもいいのかな・・・？」

日本と世界じゃ“古代”の基準がまるで違うから・・・。

日本で邪馬台国なんて言ったら古代に分類されるだろうが、世界でみたらその時代は“三国志”“五賢帝”の時代。

当然古代にしては進歩しすぎているだろう。

・・・まあそれは俺の見解で、五賢帝などは古代のカテゴリーかも知れないけれど。

適当に見繕って本を抜く。

「おろ？」

『縄文考古学』というなかなか使えそうな資料があったので手にとったのだが、その部分だけ棚が妙にへこんでおり、その奥に怪しげな赤い本が見えた。

奥にまで手を突っ込みをの本を引っ張り出す。

『クロノディステディア王国記』

・・・？

どこの国の話であろうか？

俺はかなりの歴史を読み漁ってきた。

詳しくなくとも、正直こんな国の名称も知らないようなことは無いはず。

・・・ふむ。

知的好奇心が刺激された俺は、『縄文考古学』を棚に仕舞い、その怪しげな本を小脇に抱えて読書スペースへと移動した。

平日のお昼時だからか、俺のほかに読書スペースに人間は居ないようだ。

丸いテーブルに本を置き、席に座ってページを開いた。

『クロノディステディア王国記』

中表紙にも、儼かな装飾と共にそんなことが書いてある。

それだけだ。

・・・どこの話なんだろうか？

興味をそそられてページを開く。

右開きだった。

つまり、横書きなのだ。

「へえ……」

名前からしてそうは思っていたけれど、多分ヨーロッパの話だな、これは。

物語調ではない。ほぼ箇条書きに、起こった出来事やその状況などが書き連ねてある。

どれもよく書かれており……っておいおい。

『2000年 セルナ川の戦い』

セルナ川など聞いたことがないが、それはそもそも仕方がないことだ目を瞑ろう。しかし、しかしだ。

『クロノディステディア軍魔道大隊の活躍』

魔道大隊って。

少々面白くて吹いてしまった。

ああ、なるほど。

これは、物語か。

『歴史・文学』ゾーンに有ったのはいただけないが、内容はとかく面白い。

こんな空想のクセして妙に凝っているのか情景描写がとても上手く、かつ違和感を感じさせない。

戦いの様子も手に取るように把握でき、ここまで出来の良い戦記は久々に読んだ。

日本の戦国時代よりも情景が思い浮かぶってすごいだろう。

パラパラとめくっていく。

「おろ？」

本日二度目の疑問が発生した。

この本はとても分厚い。500ページはあるのではないかと思うのだが、400ページくらいからだろうか？

ページ数以外白紙なのだ。

「ええ〜・・・面白かったのに」

仕方が無いので、そのままページをめくっていく。

もしかしたら、落丁本なのかもしれない。

そうなら続きが途中からあるはずだ。

そう思い、次々ページを繰っていった。

すると、最後の最後。最後の一枚のページの裏には・・・

『貴方が、撰ばれし者』

・・・は？

瞬間本が光り輝き、パラパラパラパラパラパラパラパラパラ
ラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラ
ラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラ
ラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラ
ラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラ
ラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラパラ

すごい勢いでページが戻っていく。

そして残すはハードカバーだけとなったとき、急に俺の体が宙に浮
き、そのまま本に吸い寄せられるようにして・・・暗転した。

ばたん、と閉じた本は、一瞬を経て、この世から消滅した・・・。

Vol. 2 降り立った世界

・・・さあ状況を整理しよう。

なんで俺は図書館にいたはずなのにこんなところに居るのか。

なんで俺はあの本をわざわざ抱えているのか。

なんで俺は・・・囲まれているのか。

場所は、よく分からないけどこれ関所じゃね？ってところ。バカでかい門の前で、俺と本は槍を持った兵士に囲まれている。

「おい貴様！ 何者だ!？」

「ええ・・・」

もうなんとかしてよこの状況。さっきから、「迷子です」とか「旅人です」とか「迷える子羊です」とか言ってるのに、全然取り合ってくれないし。いやまあ最後のは自分でもどうかと思うけど。

つーか俺を囲んでる人たち完全武装なんですけど。めっさ輝く鉄の鎧なんですけど。しかも槍なんですけど。俺普通にYシャツと黒ズボン、制服なんですけど。得物、本なんですけど。

レインボーブリッジ封鎖できませェん!!!

・・・勝ち目・・・ありません。

「いや、マジで俺ここがどこだかも分からないんですけど……」
本を持っているので両手を挙げることは出来ず、片手だけ挙げて降参の意を示す。

「いきなり空から降ってきたような奴を信用できるか!！」

「……そこなんスよねえ」

俺は聞いたところによると空から降ってきて気絶していたらしい。
それで「迷子です」は苦しいよな確かに。どっからの迷子だよ!?!
って俺も思う。

「……俺にどうしろと……?」

「まずは……そうだな。連行させてもらおう」

牢屋にぶち込まれたのは、生まれて初めてです。

まあいいや。落ち着いたし、少し脳内で整理をしよう。

俺はあの本に吸い込まれて気絶した、起きたら鎧に囲まれていた。

「情報すつくねえええ!!!」

いやいやまだあるはずだ……。

ちなみになぜか知らんが本は没収された。つつかなんで俺持ってたんだろう？

その本に吸い込まれたのは間違いない。数少ない記憶の中で、それは覚えてる。

今は昼下がり。空から降ってきたらしいが、それなら多分そこまで時間は経っていないはずだ。

だが一番の問題は。

「……ど……」

夢？

それにしても意識がはっきりしているし、さっき痛いのも試した。夢じゃない。

本の中？

そんなファンタジーな展開があるのか？ってか本の中ってなんだよ、本の中の世界ってことか？

……つまり、異世界？

………
えな。………考えたくな

とにもかくにも、日本じゃないことくらいは分かる。

だとすれば、俺が日本に戻るのには、現時点では不可能に近いな……。

まず情報だ。

今は圧倒的に情報が足りない。

まずはここがどこなのか、本格的に知る必要がある。

まあでも、もし異世界なら・・・その世界の知識を得るのも、楽しいかも知れない。

急展開なハズなのに、俺の脳内は意外とポジティブだった。

「この書物について、何かつかめましたか？」

儂い声とともに男たちの前に現われたのは少女。それも美しい、美

少女というやつだ。

「いえ・・・全く解析できない言語でして。文字の研究から始めてみないことには」

「複雑なものもあれば、至極簡単な文字も・・・この文字の規則性はどこにあるんだ？」

男達は頭を抱えて、先ほど降って来た少年の本を研究する。

少女はそれを見て、ため息をもらした。

「そうですか・・・もしかすると、新たな魔術書の可能性もありますね。少し、少年のところへ足を運んでみます」

「分かりました。お気をつけて・・・護衛をつけることを忘れずに」

少女は頷いてその本を手に取ると、地下牢へと向かった。

白銀の髪をした美少女が俺の前に現われたのは、あれからしばらくしてだった。

両隣には俺なんか一発でKOされそうなイカツいスキンヘッドのオッサンが二人控えている。

俺が無言で少女を見ていると、口を開いたのは向こうだった。

「この本は・・・何語で書かれていますか？」

俺が抱えていたあの赤い本を取り出す少女。

・・・え？ 読めないの？

「今俺たちが会話している日本語だと思いますが」

「日本語・・・？ いえ、今私たちが話しているのは、クロノ語だと思われませんが」

さて、いろいろと問題が浮上した。

俺は日本語を話しているはずなのが、彼女にはクロノ語とやらに聞こえるぞ。

そしてクロノ語という言葉俺は知らない。

いよいよ異世界くさくなってきたな……。

鉄格子をはさんで会話しているものの、彼女の物腰は至極丁寧だ。

「とにかく、その本は日本語で書かれています。それで俺からも聞きたいのですが、ここはいったいどこですか？」

「……？ クロノディステディア王国ですが？」

「!?!」

当然のように首を傾げて言うあたり、一般常識程度には国の名が知れ渡っているみたいだな。

厄介だ。記憶喪失と言おうにも、一般常識が欠けているのはおかしい。

ここは一旦、旅人で切らせてもらおうか……。

それにしても、クロノディステディアだと？

マジで本の中なのか？ ここは。とにかく一回、その本を読み返したい。

「できればその本、返してもらえませんか？」

「その前に、この本のことを詳しく聞かないことには」

「それはこのれき・・・いや、今何年ですか？」

歴史書だと言っても良いのだろうか？

俺の予想が正しければ、ここは本の中の世界。だとすれば、歴史書が歴史書でなくなる可能性がある。

つまり、歴史ではなく未来を描いたものになっている可能性があるのだ。

「今はクロノ暦195年ですが？」

！ やっぱりか！ あの歴史書は195年から208年の決戦まで、13年間のことが載っていた。

完全に本の中かも知れない。

「その本は・・・ええっと、そう文献！ 古代に関する資料だよ！」

頭の中に浮かんだのは、今日先生に言われたばかりの言葉。

彼女は訝しそくに尋ねてくる。

「文献・・・？ ですが、私には読めない、いえ私たちには読める代物ではないのです。どういうことですか？ 魔道書なのですか？
れは？」

魔道書……？

ああ、ここは魔法がある世界だったか。

いや待てよ？ それならいつそ……

「魔道書、の類ではありませんね。特定の人間にしか読めないようになっております」

「……なるほど。いいでしょう。最後に貴方の出自を伺いたいのですが」

「出自……？ 俺は遠い東の国から旅してきたんです」

「東の。だとするとジャッポーネ辺りでしょうか？」

ジャッポーネ？ それってイタリア語で日本って意味じゃなかったか？

っつーかなんで日本があるよ？

「そうですね。そこから旅する途中、爆発に見舞われまして。それでここに落ちてきたというわけです」

我ながら苦しいな。だが……。

少女は納得してくれているようだ。

「それで、今何年かも、この国の名前も分からない、と。失礼ですが、お名前をお聞かせ願えませんか？」

「一之瀬大輝っス」

「イチノ・セダイキ様ですか。分かりました。ではイチノ「待て待て待て待て！」・・・なんですか？」

誰だよセダイキ。

「名前がダイキ。苗字がイチノセ」

「・・・でしたら、ファースト・ファミリーの順で名乗る事は教わらなかったのですか？」

「悪いっスね。故郷ではそっちなモンで」

「・・・ではダイキさん。貴方をひとまず釈放いたします。それから・・・私を助けてはいただけられないでしょうか？」

・・・は？

俺が思考停止していると、彼女は牢の鍵を開け、俺に出るよう促した。

「出していいんですか？ 一応捕まっている身ですけど」

「ええ。とにかく対等にお話を伺いたいです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045t/>

異界の歴史書

2011年5月21日12時16分発行